

論文

移動と定住のアイデンティティ

—英国日本人会へのアンケート調査結果の分析—

三宅和子

1. はじめに

近年、海外の複数の国と日本を行き来する人々や、特定の地域に根づき生活する日本語話者が増え、旧来の「移民」という枠組みでは捉えきれない新しいタイプの「移動する人々」の存在が認識されるようになってきた。

筆者は、戦後高度成長期以降に自らの意思で海外に長期間在住あるいは永住する日本語話者を、「日系ディアスポラ」と名づけ、そのことばとアイデンティティの関わりを研究してきた。本稿で取り上げる「英国日本人会」のメンバーの多くは、日本人の国際間移動がまだまだ少なかった時代に、様々な目的や事情で海を渡り、英国に居を構え、高齢期を迎えた人々である。現在の「トランスナショナルな」(国境を越えた)動きの先駆けを作った人々であるともいえよう。

トランスナショナルな日本人の増加は、グローバル化の世界状況の中で必然的に起こってきた現象といえよう。過去数十年間の人の移動によってもたらされた多様性は、さらなる多様性を生み出しており (Vertovec 2007)、これは日本人に関しても例外ではない。多くの人々が国境を越え移動し、帰属する社会や国が固定されない状況が拡大するにつれ、個人のアイデンティティは確固としてあるのではなく、交渉可能であり、人生を通して形作られ変容していくものであるという考え方が説得力をもって迫ってくる (三宅 2016b)。堅牢なものとして語られがちであった、日本・日本人・日本語・日本文化といった概念も、その相互の結びつきとともに再考する必要がある。

近年、従来の日系移民の研究とは異なる日本語話者の「移動」に関する研究が増加しつつある。国際化社会における「個」を問うた岩崎 (2007)、トランスナショナルな若者の文化移民を論じた藤田 (2008) や、アメリカの日本人家族と教育を扱った額賀 (2013) など、社会学や教育学からの視点の研究は少なくない。また、海外に永住する高齢者に関する

る調査は、金本（2014、2015）^(注1) の日系人の「古い」をテーマにした一連の調査や、ニューヨーク日系人会（2006）の高齢者実態調査などがある。しかし、海外に住む高齢の日本語話者のことばとアイデンティティに注目して行った社会言語学的な調査や研究は、管見の限りない。

本稿は、2015年11～12月に行った「英国日本人会」へのアンケート調査の一部を使用し、英国に根を下ろした日本語話者が自らをどのように捉え、どのように生きようとしているかを、「アイデンティティ」をキーワードに探る。これまでインタビュー調査と参与観察を行ってきたが、別に行った2000年前後に移住し子育て中の若い世代の調査結果と比較すると、自らの位置付けや日本へのまなざし、日本語や日本文化の継承に関する意識など、様々な側面で異なりがみられ、移住した年代や社会背景、在住期間、日本からの情報量やコミュニケーション手段の違いなどが影響していることがみえてきている（三宅 2014、2016a三宅編 2015）。本稿では、回答者全員のデータと、その1割程度を占める英国籍保持者のデータとを対比的にみていく。英国籍保持者の立ち位置・最終居住予定地の選択や決定要因などを、回答者全員と比較分析することを通して、日本国外に長期滞在、永住をする日本語話者にとって、「日本人」アイデンティティの根拠は何か、言語、文化、国籍などはどのようにかかわっているのかを考察し、グローバル化時代に生きる人々にとっての「移動」と「定住」の意味を考えたい。

2. 背景

日本国外に在留する日本国籍保持者は、2015年10月1日集計で131万7078人にのぼり、外務省が統計を開始した1968年以降最多となった。このうち「長期滞在者^(注2)」は85万9,994人で全体の約65%を占め、「永住者^(注3)」は45万7,084人である。しかし永住者数の伸び率は、長期滞在者をはるかに上回っており、この5年間で約14%増加している。国別在留邦人数では、アメリカ、中国、オーストラリアに次いで、イギリスは世界第4位の地位を保っている。その首都ロンドンは、都市別在留邦人数では世界第3位（外務省領事局政策課2016）である。

ロンドンにおける日本人集団の定住は、1983年長州藩の5人（長州ファイブ）^(注4) に始まると一般的にいられている。明治以降、留学生や役人の他、様々な職種の日本人が住むようになり、日系社会は活況を呈した。第2次世界大戦になると、マン島への強制収容や強制帰国が行われ、日系の企業や人口は激減した（Itoh 2001）が、戦後の高度経済成長期から多くの日本企業が拠点を置くようになっていった。現在では日本語で対応できる診療所や日本商店が数多くあり、日本語話者にとっては住みやすい都市の一つである。しかし、駐在員のように日本帰国を前提とした在留者向けの「日本クラブ」などの組織はあるものの、定住者に特化した組織はなかった。

自ら故国を離れて高齢期を迎えた人にとっては、老後をいかに有意義に過ごすかや死や

お墓の問題が関心事として大きく浮かび上がってくる。加齢とともに英語を使うことが不自由になっていくという報告を耳にしたり^(注5)、逆に日本語が難しくなっている高齢者を目の当たりにすることもある。渡英当時、日本語を話す環境になかったことや日本・日本語の価値が相対的に低かったことなどもあり、子供に日本語が十分に継承されていないケースが多い。

英国日本人会（Japan Association in the UK、以下JAと略称）は、このような人々が中心になり、老後を見据えて1996年にロンドンで創設された定住者のための互助会組織である。会員の8割以上が女性で、その多くが国際結婚家庭を築いており、在英期間が50年を超える者も含まれる。当初小さな集まりであったが、現在では会員数300人余の団体として2016年に20周年を迎えた。「移動」と「定住」のはざままで生きる人々によって形成された新しい日系コミュニティといえよう。

JAでは様々な活動が行われている。勉強会、セミナーの開催をはじめとする文化交流、英国を歩く会・カラオケ・坐禅会などの健康増進活動、会員の慰問や援助を行う福祉活動のほか、墓地管理、日本の大震災後の援助、チャリティ活動などである。加えて、毎月のニューズレター、メールでのイベントのお知らせや情報の発信、年2回の『英国春秋』というジャーナルの発行も行っており、近年はロンドンのトラファルガー広場で行われるJAPAN MATSURIでも大きな役割を果たすなど、その活動は多岐にわたる。

3. 調査概要と対象者の社会背景

本稿で用いた調査の概要は以下のとおりである。が、本稿で扱うのは調査の一部である。扱われなかった部分に関しては稿を改めて論じる予定である。本稿末に付録としてアンケート内容を示した。

調査：2015年11月～12月

調査方法：アンケート調査（郵送回収法）

調査対象者：英国日本人会会員

回答者数：138名

JAの会員数は近年300人前後を推移しており、2015年11月にアンケートの一斉送付（郵送）を行った際の会員数は315名であった。返信のあった回答者は、女性111名（80%）、男性23名（17%）、性別無回答者4名（3%）の計138名である。30歳代から90歳代までの回答者の平均年齢は65歳で、年齢別にみると、60～69歳が最も多く56名（41%。性別無回答3名を含む）で、70～79歳が43名（31%。性別無回答1名を含む）、50～59歳が19名（14%）である。60～80歳の女性を中心とした集団であることが分かる（図1）。

配偶者の有無では、既婚者が92名（67%）と最も多く、次いで死別23名（17%）、離婚12

名（9%）、未婚8名（6%）と続いている（図2）。結婚相手の国籍をみると、無記名のものがあり（25名）、記入の仕方にもバラつきがあるため、厳密な算出は難しいが、二重国籍や永住権保持者を含めて英国籍と日本国籍が最も多く、各々25名～30名で拮抗している。このほかに北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランドなどの英語母語話者と考えられる者が各1～2名。ベルギー、中国、タイといった記述もあり、国際色豊かである。英国籍の配偶者の中には、インドなどの旧英領出自の人も含まれており、国籍＝民族（エスニシティ）、人種を表すものではないことには、留意が必要である。

就業状況を見ると、退職者が60名（43%）と最も多く、フルタイム25名（18%）、パートタイム14名（10%）、無職12名（9%）と続く（図3）。「その他」の中には「主婦」や「退職後パートタイム」などの回答が含まれていた。過半数は仕事を辞めるか、していない状態であることが分かる。

次に渡英した理由を聞いた。理由で最も多かったのが「留学」で37名（27%）、次に「結婚」31名（22%）、「仕事」29名（21%）と続いている。「その他」も26名（19%）と少なくなく、その内訳は様々であった（図4）。

最初の渡英後、イギリスに長期に留まるようになった理由（在英理由）を聞くと、結婚が89名（64%）と圧倒的に多く、次が仕事の40名（29%）であった（図5）。「その他」21名（17%）の内訳は、渡英理由よりさらにバラエティに富んでいる。

図1. 年齢別人数と男女比

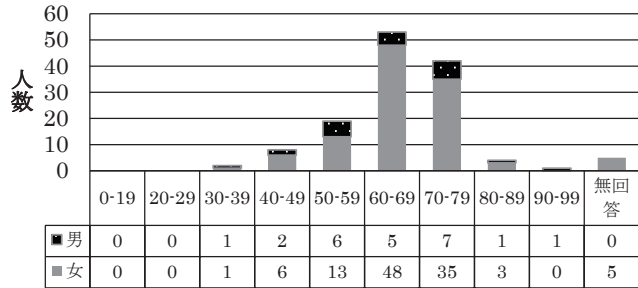


図2. 配偶者の有無

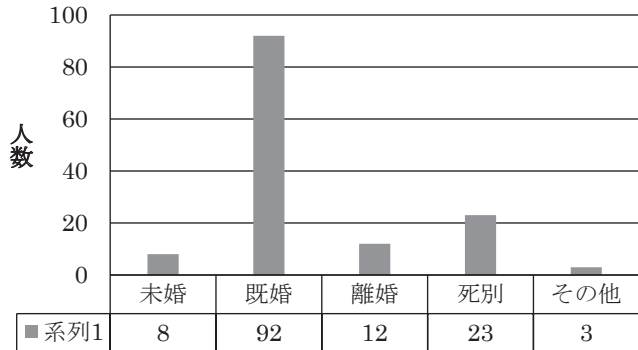


図3. 就業状況

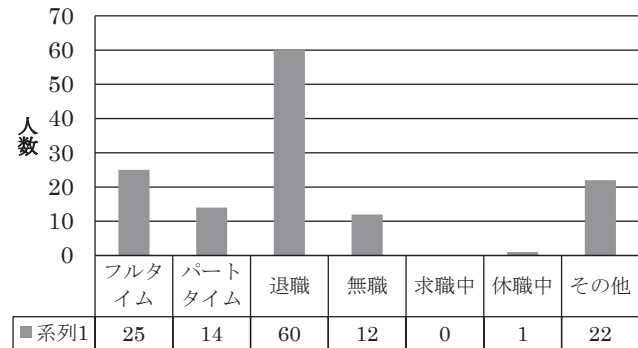
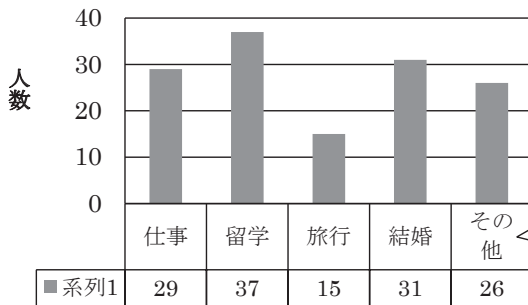


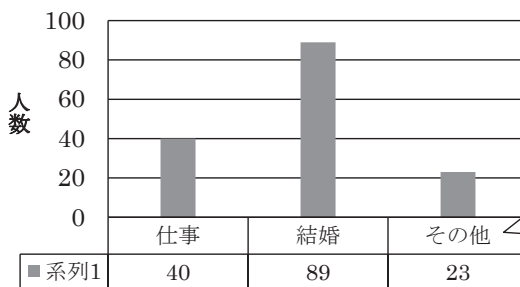
図4. 渡英理由



渡英理由「その他」の内訳

英国人配偶者の定年退職のため、主人の仕事のため、Au Pair として、イギリス居住希望、子どもの教育、日本での定年退職後、家内の留学、パートナーのロンドンへの移動、ボランティア、遊学など

図5. 在留理由



在留理由「その他」の内訳

渡英理由と重なるもの以外を示す。家族から独立したかった、住みやすさ、仕事先で結婚相手と会って、生活様式に魅かれて、文化に興味をもった、東京よりロンドンの方がいいなど

4. アイデンティティをめぐって

次に、アイデンティティに直接関わるとと思われる質問を行った。まず、どのような在留資格で居住しているかを聞いたところ、86%に当たる118名が永住権保持者であった。次は英国籍保持者で14名、ビザ5名、無回答が1名であった(図6)。回答者のほとんどが日本国籍を保持したまま、永住権を取得して長期滞在を続けたり永住に踏み切ったりした者であることが分かる。

図7は、自らを何人と捉えているかを聞いた結果である。127名(92%)が「日本人」と答え、残りは「イギリス人」2名、「その他」8名、無回答が1名であった。自らを日本人と位置づけている回答者が、日本国籍保持者の数を上回っていることが分かる。

そこで英国籍保持者と、「その他」と回答した者について、さらに詳しく調べてみることにした。英国籍保持者14名のうち、自らを日本人と捉えている回答者は11名(79%)、日本人でもイギリス人でもあると答えた者が1名、イギリス人と答えた者が2名であった。英国籍の回答者の8割が自らを日本人と捉えていることは興味深い。また、次に述べる「その他」の回答者と比べると、自らを日本かイギリスかの2項対立で位置づけている傾向が

強いのも特徴的である。

アイデンティティを「その他」とした回答者たちは、具体的には自らをどのように捉えているのだろうか。「日本人とイギリス人」と答えた者が3名で、それ以外に「日本人と地球人」1名、「日本生れの儒教の影響を受けたアジア人でもあるし、ある面でイギリス人的でもあり、ネパールインドを6ヶ月back pack旅行をしてからはアジア大陸人の感覚もある。」1人、「日本人、国籍を超えた人」1名、「日本人、その他」1名、「日本人、日系イギリス人」1名、「わからない」1名と、国籍の枠組みを超えた存在として自らを捉えようとしている意識が感じられる。

これらの自らの位置づけは、どのような根拠に基づいているのだろうか。アイデンティティと強い関連があると一般的に考えられている要素として、国籍、民族、人種、文化、言語を設定し、「その他」を加えて聞いた。

回答者全体の答え（複数回答可）では、国籍98名（71%）、文化85名（62%）、言語78名（57%）、人種60名（43%）、民族47名（34%）で、国籍が最も高い。文化や言語も、自らのアイデン

ティティと強くつながっていると考えられていることが分かる（図10）。ためしに、永住権保持者だけを抜き出してみたが、国籍93名（79%）、文化79名（67%）、言語73名（62%）、人種56名（47%）、民族42名（36%）となり、回答者全体との有意な差はなく、順位も同様

図6. 国籍・居住権

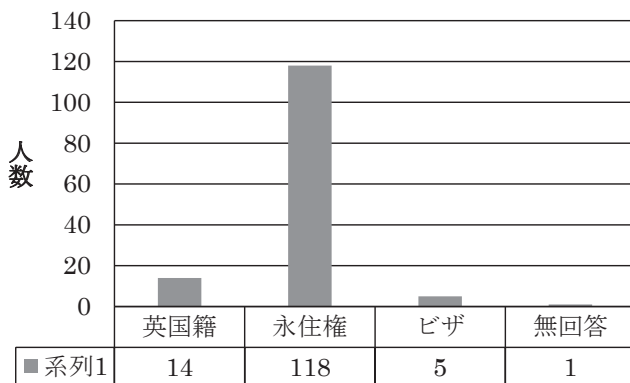


図7. アイデンティティ（全員）

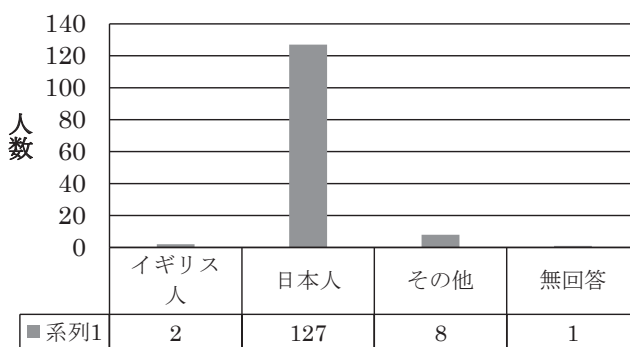
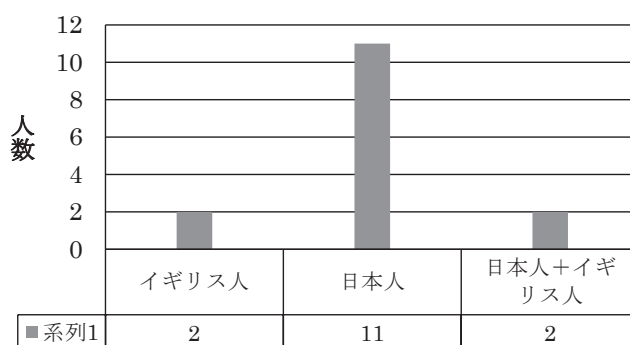


図8. 英国籍保持者のアイデンティティ



であった。

いっぽう、英国籍保持者（14名）のアイデンティティの根拠をみてみよう（図11）。人種と文化が7名（50%）、言語が6名（43%）、国籍が4名（29%）、民族2名（14%）となっている。回答者全体や永住権保持者の結果とは異なり、人種、文化、言語が最も強くアイデンティティと結びついていると感じられていることが分かる。ただし国籍も少なからず選択されている。図8のアイデンティティの質問で、「イギリス人」あるいは「日本人+イギリス人」と回答した者が図11の「国籍」を必ずしも選択しているわけではない。この選択の根拠は自らのアイデンティティの根拠というより、アイデンティティを考えたときの一般的な根拠を選んだと考えたほうがいいのではないだろうか。英国籍保持者のデータ数が少ないため、断定的なことは言えないものの、国籍よりも人種、文化、言語にアイデンティティとのつながりを感じている点は興味深い。英国籍を取得した理由が明らかではない現時点では、フォローアップ・インタビューで何らかの要因を追究すべきと考えている。

「その他」を選んだ回答者（8名）をみると、文化5名（63%）、次いで民族4名、人種、国籍各3名、言語1名となっており、全体とも英国籍保持者とも異なる根拠を示していた

図9. 「その他」のアイデンティティ



図10. アイデンティティ（全員）の根拠

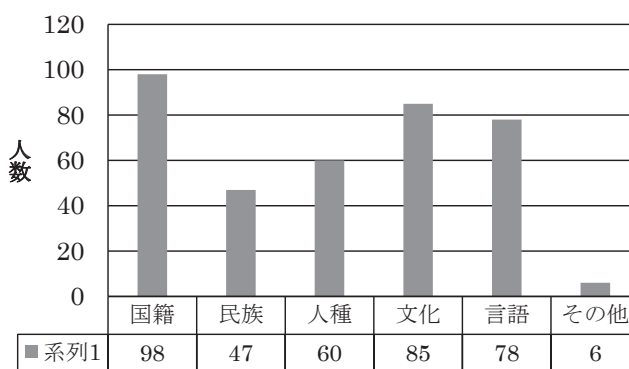
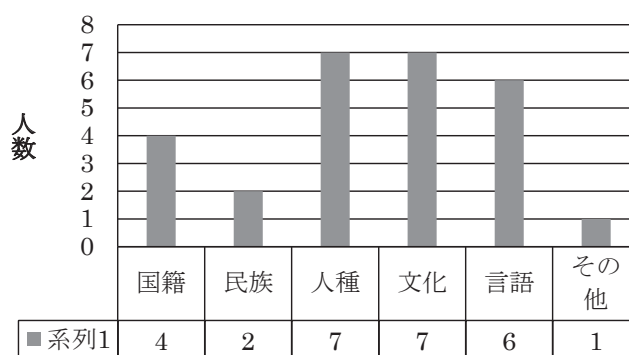


図11. 英国籍保持者のアイデンティティの根拠



(図12)。このカテゴリーもデータ数が少ないため、さらなる調査が必要だが、国籍が第3位に位置することや言語にはあまり根拠を求めていることは興味深い。

図10から図12を通して特筆したいことは、国籍以外で最もアイデンティティの根拠となりやすいのは文化であり、言語はいずれのカテゴリーにおいても、文化をしのぐほどの根拠にはなりえていないことである。

5. 老後の居住予定地選択と選択要因

終の棲家としての、老後の居住予定地について聞いた。JAが「イギリスに根を下ろした日本人のための互助会のようなもの」という発想で発足したことを考えると、英国永住を想定している者が大半を占めるものとの予想をしていた。しかし、英国永住を選択した者は75名（54%）とわずかに半数を超えるにとどまり、最多ではあるものの、その他の道を模索している者が多く存在していることが示された。「決めていない／わからない」が39名、「日本に帰国」が13名に上り（図13）、両国の狭間で迷っている者が少なくないことがわかる。長い英国暮らしを経ても、「日本人」としてのアイデンティティ

図12. 「その他」のアイデンティティの根拠

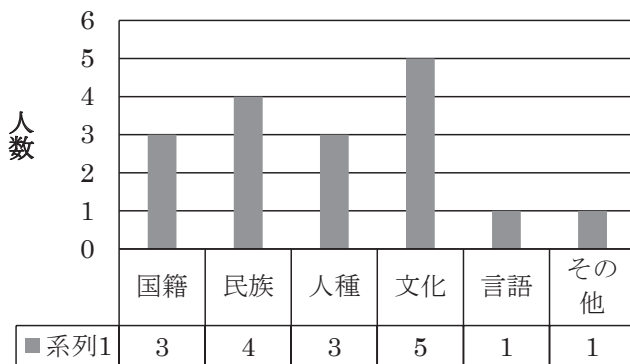


図13. 老後の居住予定地（全員）

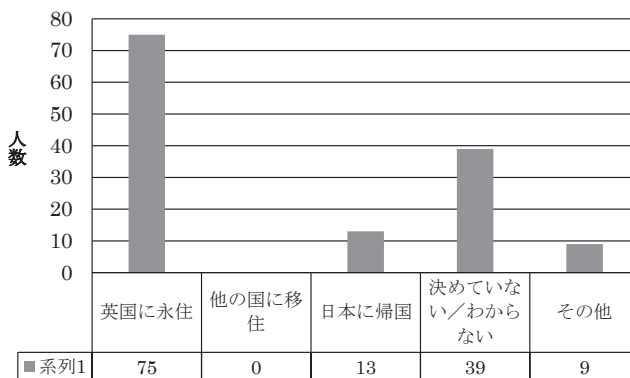
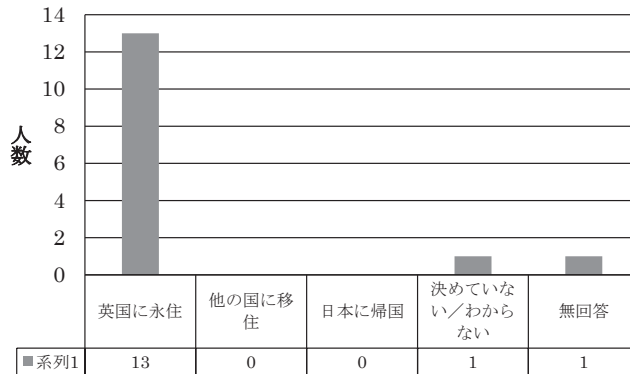


図14. 英国籍保持者の老後の居住予定地



ティが強く、国籍をはじめとする日本に強い所属意識をもっており、最終的な安息の地として日本を選びたいと感じている人が少なくないことの表れであろう。

いっぽう、英国籍保持者のみに限ってみてみると、14名中13名（93%）が英国永住を選択しており、日本人としてのアイデンティティをもちながら、日本への帰国を考えていない点で、全体の回答者とは明確な違いをみせた（図14）。

そこで、居住予定地を選択する際の要因の違いを調べ、両者の立ち位置の違いや自らの意味付けの違いなどを探ってみた。

全員の回答の中で最も多かったのは、「配偶者のいる所」と

「所有住居がある所」各54名（39%）であり、「子どもがいる所」48名（35%）がそれに続く。この3項が最も重要な要因であるといえる。その他、「施設」（より良い高齢者施設がある所）、「日本の友人」（日本の友人がいる所）、「親類」（親類がいる所）、「両親」（両親がいる所）の順で選ばれている。「その他」には、医療、住み心地の良さ、人間とのかかわり、日本食が食べられる所など、様々なものが上がっていた。

これに比して、英国籍保持者の回答はシンプルであった。最も多く選ばれている要因は、「配偶者のいる所」8名（57%）、「子どもがいる所」7名（50%）、「所有住居がある所」6名（43%）の3項目であり、この点では全体の回答と類似している。しかし、それ以外は、「施設」が2名に選ばれているものの、「日本の友人」、「親類」、「両親」はまったくなく、3項に選択が集中している。英国籍を取得することにより日本国籍を捨てたケースと、そのまま日本国籍も保持したケースが現実的にはありうる。それが英国籍取得の理由とともに老後の居住予定地の選択にどのようにかわるか、これもフォローアップ・インタビューで明らかにする必要があるようだ。

最後に、配偶者の有無と居住予定地との関係性をみておきたい。すでにみたように、居住予定地の選択要因のトップ3は、配偶者と子供と所有住居であった。そこで、配偶者（パ

図15. 老後の居住予定地の選択要因（全員）

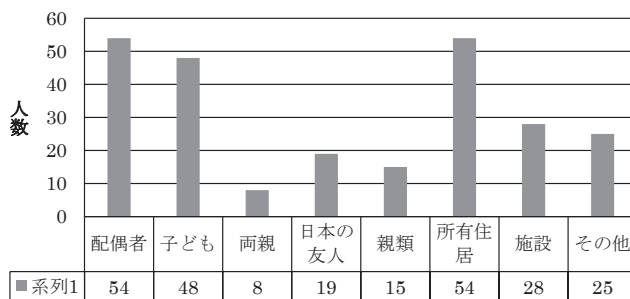
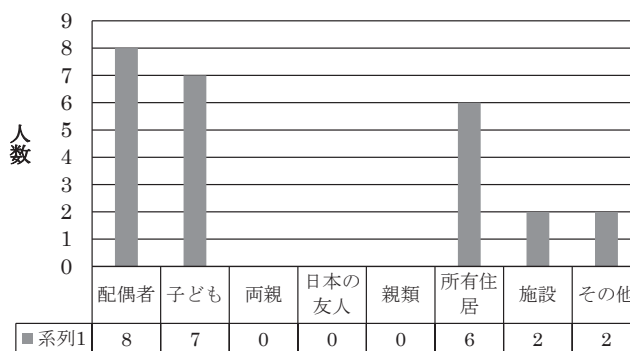


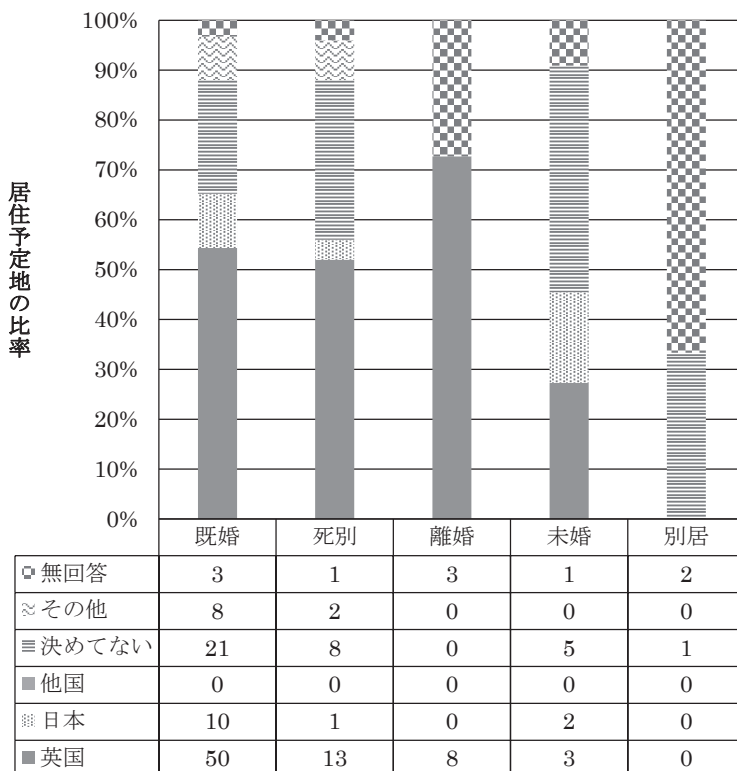
図16. 英国籍保持者の老後の居住予定地の選択要因



ートナーなどの同居人を含む)の有無と居住予定地の選択とがどのような関係にあるかをみたのが、図17である。人数として最も多い「既婚」(50名)とその次の「死別」(13名)をみると、英国を居住予定にしている者が50%を超える点で一致している。「死別」は配偶者の死まで結婚していたことを示し、子どもがいる可能性も高い。この2つのカテゴリに入る回答者は、先の図13でみた英国居住を選択した50%を超える人たちを代表していると考えられる。「死別」者のほうが「既婚」者より「決めていない」割合が多く、日本を居住予定にしている人の割合が少ない。いっぽう、「離婚」者で日本を選んだ者は1人もおらず、英国を終の棲家と考えている割合が最も高く、無回答の割合も最も高かった。さらに「未婚」者は、全体の中で英国永住を決めていない割合が最も高く、「日本」と「決めていない」を選んだ割合が最も高かった。イギリスを去ることによる現実的な不都合が最も少ないカテゴリであることと、関連があるかも知れない。「別居」に関してはわずか3名しかいないため明確なことは言えないが、回答したのは1名のみで、「わからない」を選んでおり、無回答が2名であった。

人生の最後をどの地で過ごしたいかという希望は、個人のアイデンティティとかかわっており、国籍の有無以外に、イギリスにどれほど深く根を下ろしたかの指標にもなりうる「配偶者」や「子ども」の存在が、居住予定地の選択要因になり、アイデンティティの形成にも影を落としていることが示唆されたといえよう。

図17. 配偶者の有無と老後の居住予定地



6. まとめ

本稿は、2015年11～12月に行った「英国日本人会」へのアンケート調査の結果の一部を使用し、英国に根を下ろした日本語話者が自らをどのように捉え、どのように生きようとしているか、「アイデンティティ」をキーワードに探った。回答者の1割程度を占める英国籍保持者に注目し、その立ち位置・最終居住予定地の選択や決定要因などを、全体の回答者（永住権保持者中心）と比較分析することを通して、日本以外の国に長期滞在、永住する日本語話者にとって、「日本人」アイデンティティの根拠は何なのか、言語、国籍、文化、人種、民族などの概念がどのようにかかわっているのかを考察した。

調査の結果、回答者の多くは、留学、結婚、仕事をきっかけに渡英しているが、長期在留を決定づけたのは、結婚が最も多かったことが分かった。

JA会員の多く（86%）が永住権保持者で、全回答者の9割以上が自らを日本人と位置づけているが、約1割いる英国籍保持者の8割も自らを日本人と考えていた。アイデンティティの根拠となるのは、回答者全体では国籍71%、文化62%、言語57%であった。データ数は少ないものの、英国籍保持者では人種と文化が50%、言語が43%選ばれている。アイデンティティを「その他」とした回答者は、その根拠を文化63%、民族50%、人種、国籍33%に求めていた。全体を眺めると、国籍以外でアイデンティティの最も強い根拠となりうるのは文化であり、言語はいずれのカテゴリーにおいても、文化をしのぐほどの根拠にはなりえていなかった。

終の棲家として英国永住を選択した者は、全体ではわずかに半数を超える54%にとどまったが、英国籍保持者においては93%であった。最終居住地を決める要因としては、「配偶者」と「子ども」、「所有住居」の3項であった点で、全体の回答者と英国籍保持者は同様であった。しかし、「施設」、「日本の友人」、「親類」、「両親」など、永住権保有者にとっては考慮の対象となる選択肢を英国籍保持者はほとんど選んでいないところが、特徴的であった。イギリス国籍の有無以外に、イギリスにどれほど深く根を下ろしたかの指標となりうる「配偶者」や「子ども」の存在が、居住予定地の選択要因になり、アイデンティティの形成にも影を落としていることが示唆された。

今回は、アンケート調査「I.自分自身、II.家族、III.言語使用、IV.社会生活」のうち、アイデンティティと深くつながる「I.自分自身」と「IV.社会生活」の結果を選択的に使用した。それ以外の結果については、稿を改めて報告したい。

謝辞 ご協力いただいた英国日本人会と会員の皆様に感謝の意を表したい。なお、本研究はJSPS科研費 15K12898の助成を受けたものである。

〈注〉

1. 金本（2014）の調査は、英国日本人会ほかのロンドンを中心とした高齢化する日系住民の実態を、特に高齢者福祉の観点から探ったものである。本稿もその関心の一部を共有する。
2. 3か月以上の海外在留者のうち、海外での生活は一時的なもので、いずれわが国に戻るつもりの方をさす（外務省領事局政策課 2016）。
3. 当該在留国等より永住権を認められており、生活の本拠をわが国から海外へ移した邦人をさす（外務省領事局政策課 2016）。
4. 長州ファイブ（五傑）とは、幕末期の1863年、禁を犯して渡英しロンドン大学で学んで近代日本の礎を作った伊藤俊輔（博文）をはじめとする長州藩の5人をさす。
5. ニューヨーク日系人会、邦人・日系人高齢者問題協議会（2006）『邦人在米邦人・日系人の「高齢者問題に対する意識調査」』にも記載がある。
<http://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h5/Report.pdf>（2013.10.11参照）

〈参考文献〉

- 藤田結子(2008)『文化移民—越境する日本の若者とメディア』新曜社
- 外務省領事局政策課(2016)「海外在留邦人数調査統計 平成28年版」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pd> 2016年6月28日参照
- 法務省(2016)「平成27年末現在における在留外国人数について(確定値)」
<http://www.moj.go.jp/content/001178165.pdf> 2016年7月1日参照
- Itoh, K.(2001) *The Japanese Community in Pre-War Britain: From Integration to Disintegration*. Richmond, Surrey: Curzon.
- 岩崎久美子(2007)『在外日本人のナショナルアイデンティティ』明石書店
- 金本伊津子(2014)日本人のグローバル・マイグレーションの今：イギリスにおける日本人の高齢化に関する意識調査(1)『桃山学院大学総合研究所紀要』40(1) pp.1-24. 桃山学院大学
- 金本伊津子(2015)「オランダで迎える日本人の老い：在蘭日本人の高齢化に関する意識調査」『桃山学院大学総合研究所紀要』41(1) pp.55-80.
- 三宅和子(2014)「在英日系ディアスポラの言語生活—国際結婚した日本人女性とコミュニティの形成—」『文学論藻』第88号 pp.150-132.(pp.(45)-(63))東洋大学
- 三宅和子編(2015)「複言語使用者は日本語・日本をどのように捉え、どのように向き合っているか」『ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(2014) 報告・発表論文集』パネルpp.59-76.
- 三宅和子(2016a)「国際結婚家庭の日本語をめぐる選択と実践—英国在住の親子のケース・スタディー—」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.28 pp.102-112.
- 三宅和子(2016b)社会言語学の新潮流—'Superdiversity'が意味するもの—『早稲田日本語教育学』第20巻1号 pp.99-104.
- 額賀美紗子(2013)『越境する日本人家族と教育』勁草書房
- Vertovec, Steven(2007). Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies* 30(6): 1024-1054.

—みやけ かずこ・文学部教授—

〈付録：アンケート調査用紙〉……………(アンケート項目部分のみ掲載)

以下の項目について、ご自分に最も適した番号を○印で囲むか、カッコ内にコメントをお書きください。なお、ご自分にあてはまらない場合はNAを、回答したくない項目があれば斜め線「/」をお書きください。紙面が足りない場合は、最終頁の裏面にご自由にご記入ください。

I. あなたご自身についてうかがいます。

1.1 さしつかえなければ誕生年、性別を教えてください。

_____年生まれ ①女性 ②男性

1.2 イギリスでの在留状況を教えてください。

①英国籍取得 ②英国永住権取得 ③ビザ ④その他 ()

1.3 イギリスの居住地について教えてください。

①グレーター・ロンドン ②その他 ()

1.4 居住期間について教えてください。

_____年来英 (観光などの短期間の訪問は除く) 在英_____年間

1.5 イギリスに最初に来た理由について教えてください。

①仕事 ②留学 ③旅行 ④結婚 ⑤その他 ()

1.6 イギリスに長期在留することになった理由について教えてください。

①仕事 ②結婚 ③その他 ()

1.7 現在の婚姻状況を教えてください。

①未婚 ②既婚 ③離婚 ④死別 ⑤その他 ()

1.8 現在の就業状態を教えてください。

①フルタイム ②パートタイム ③退職 ④無職 ⑤求職中
⑥休職中 ⑦その他 ()

1.9 あなたは、御自分を何人だと思っていますか (複数に○をつけても可)。

①日本人 ②イギリス人 ③_____人 ④その他 ()

1.10 どのような理由から1.9の答えになりましたか (複数に○をつけても可)。

①国籍 ②民族 ③人種 ④文化 ⑤言語
⑥その他 ()

Ⅱ. あなたの家族の言語についてうかがいます（ご自分の状況に適した箇所のみご記入ください。「／」の部分は記入不要です）。 *下の表はスペースの都合上、縮小して表示

	自分の父親	自分の母親	配偶者の父親	配偶者の母親	自分	配偶者	第1子	第2子	第3子	第4子
国籍(複数ある場合は明記)										
第1言語										
第2言語	/	/	/	/	/	/				
第2言語能力(第1言語を100とすると)	/	/	/	/	/	/				
その他の使用言語(あれば)	/	/	/	/	/	/				
年齢	/	/	/	/	/	/				
居住国	/	/	/	/	/	/				
子どもの配偶者の出身国	/	/	/	/	/	/				

* 「パートナー」の場合も「配偶者」の欄にお書きください。

* 「配偶者」の欄には、死別、離婚などで現在お一人の方や、再婚されている方も、差し支えない範囲でお子さんの親のことをお書きくだされば幸いです。

【備考】この表に適應しないことがありましたら、この下にお書きください。

Ⅲ. 言語使用についてうかがいます（ご自分の状況に適した箇所のみご記入ください）。

① まず、全員の方のうちうかがいます。

3.1 仕事で日本語を使いますか／使っていましたか。

①常時使用 ②かなり頻繁に使用 ③半分ほど使用 ④時々使用 ⑤不使用

3.2 家庭以外の日常生活で日本語を使っていますか。

①常時使用 ②かなり頻繁に使用 ③半分ほど使用 ④時々使用 ⑤不使用

② 配偶者／パートナーがおいでの方／おいでだった方のうちうかがいます。

3.3 配偶者／パートナーとは何語で話してきましたか。

①日本語 ②英語 ③その他の言語（ ）

3.4 配偶者／パートナーと言葉の面で感情や意思の疎通がうまくいかないと感じたことがありますか／ありましたか。

①頻繁にある／あった ②ある程度ある／あった ③時々ある／あった

⑤まったくない／なかった

③ お子さんがおいでの方／おいでだった方のうちうかがいます。兄弟姉妹で育て方が異なる場合は、横に付け足してお書きください。

3.5 お子さんが生まれてから日本語で話しましたか。

①はい：現在も日本語で話している

②はい：子どもが_____歳ころまで続けた

③いいえ

3.6 お子さんに日本語の読み書きを勉強させましたか。

- ①はい：現在も日本語の読み書きを勉強させている
- ②はい：子どもが_____歳ころまで続けた
- ③いいえ

3.7 3.5、3.6で②か③と答えた人は、現在、お子さんとは主に何語で話していますか。

- ①英語
- ②その他の言語 ()

3.8 3.5、3.6で②か③と答えた人は、日本語で話したいと思うことがあります／ありましたか。

- ①はい：理由 ()
- ②いいえ：理由 ()

3.9 お子さんは現在、どの程度日本語が話せますか。

- ①日本人と同じ程度話せる
- ②親戚や家族とある程度内容のある会話ができる
- ③観光で旅行する程度は話せる
- ④挨拶や簡単な受け答えはできる
- ⑤まったく話せない
- ⑥その他 ()

3.10 お子さんが日本語を話せることは、あなたにとってどのくらい重要ですか。

- ①非常に重要
- ②まあまあ重要
- ③どちらともいえない
- ④あまり重要ではない
- ⑤まったく重要ではない

3.11 3.10で選んだ答えですが、どのような意味で／場合にそうだと思いますか。

3.12 お子さんが日本文化を理解できることは、あなたにとってどのくらい重要ですか。

- ①非常に重要
- ②まあまあ重要
- ③どちらともいえない
- ④あまり重要ではない
- ⑤まったく重要ではない

3.13 3.12の「日本文化」とは、具体的にどのようなことをイメージして答えましたか。

IV. あなたの社会生活についてうかがいます。

4.1 日本の情報は主にどこから得ていますか（複数に○をつけても可）。

- ①JSTV
- ②日本の新聞
- ③日本の雑誌や本
- ④フリーペーパー
- ⑤インターネット
- ⑥その他 ()

4.2 日本にいる人（友人や親戚など）と電話などを使って話す頻度を教えてください。

- ①毎日
- ②2～3日に1回
- ③1週間に1回
- ④1か月に1～2回
- ⑤その他 ()

4.3 日本にいる人（友人や親戚など）とメールなどの電子機器で連絡する頻度を教えてください。

- ①毎日
- ②2～3日に1回
- ③1週間に1回
- ④1か月に1～2回

⑥その他 ()

4.4 普段、親密に付き合っている相手は何人ぐらいですか。

- 日本人： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上
イギリス人： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上
日英以外： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上

4.5 普段、親密ではないがある程度の頻度で付き合っている相手は何人ぐらいですか。

- 日本人： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上
イギリス人： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上
日英以外： ①0人 ②1～3人 ③4～9人 ④10人以上

4.6 英国日本人会に入会した理由は何ですか（複数に○をつけても可）。

- ①日本の友人作り ②日本人ネットワーク作り ③日本の情報を得る
④イギリスの情報を得る ⑤日本の文化を共有 ⑥友人に誘われて
⑦その他 ()

4.7 あなたはイギリスの生活に満足していますか。

- ①大変満足 ②まあまあ満足 ③どちらともいえない
④あまり満足ではない ⑤全く満足ではない

4.8 自分の思っていることや考えていることが英語で十分表現できているとお考えですか。

- ①十分できている ②まあまあできている ③どちらともいえない
④あまりできていない ⑤全くできていない

4.9 イギリス社会で、部外者のような疎外感をもつことがありますか。

- ①たえずある ②かなりある ③時々ある ④全くない

4.10 4.9で①～③と答えた人は、どのようなときに疎外感をもつかを教えてください。

4.11 現在、日本にどのくらいの頻度で帰っていますか。

- ①毎年___回 ②2～3年に1回 ③4～5年に1回 ④その他 ()

4.12 今後の居住予定を教えてください。

- ①英国に永住 ②他の国に移住 ③日本に帰国 ④決めていない／わからない
⑤その他 ()

4.13 4.12の居住予定の選択には、何が関わっていますか（複数に○をつけても可）。

- ①配偶者がいる所 ②子供がいる所 ③親がいる所 ④日本の友人がいる所
⑤親類がいる所 ⑥所有住居がある所 ⑦より良い高齢者施設がある所
⑧その他 ()

4.14 4.12で居住地を移動する選択をした人は、いつごろ移住／帰国予定ですか。

- ①5年以内 ②10年以内 ③15年以内 ④20年以内
⑤その他 ()